

## 脳動脈瘤術後5年を経て生じた動静脈奇形：症例報告と文献的考察

De novo arteriovenous malformation after clipping of the aneurysm: case report and review of the literature

志藤 里香<sup>1</sup>, 小林 正人<sup>2</sup>, 狩野 忠滋<sup>1</sup>, 赤路 和則<sup>1</sup>, 神澤 孝夫<sup>1</sup>, 谷崎 義生<sup>1</sup>

<sup>1</sup>美原記念病院脳神経外科, <sup>2</sup>埼玉医科大学脳神経外科

【はじめに】脳動静脈奇形(AVM)は胎生早期に発生する先天性異常とされ、発生頻度は12.4人/100万人/年と報告されている。一方非常にまれではあるが後天性に発生したAVMも報告されている。脳動脈瘤の直達手術後、5年間の経過観察を経てAVMをde novoに生じた一例を経験したので文献的考察も含めて報告する。【症例】73歳女性。64歳時、右の未破裂中大脳動脈瘤に対しクリッピングを行った。術後に合併症はなく経過は問題なかったが、69歳時、経過観察のため施行したMRIにて右頭頂葉に新たなAVMの出現を認めた。AVMは右中大脳動脈の分枝をfeeder、脳表静脈をdrainerとし平均径18mm、Spetzler Grade 2であったが、年齢と患者の希望を考慮し、ガンマナイフで治療を行った(nidusの体積は2.0ml。辺縁線量18Gy最大中心線量36Gy)。治療後5年目、残存する脳動静脈奇形(体積0.2ml)に対し再度辺縁線量20Gy、最大中心線量36.4Gyで照射を行った。再治療後1年が経過し、病変は更に縮小した。再出血や照射部位の浮腫、嚢胞形成は認めない。【考察】本患者では以前の血管造影検査上、AVMがないことが確認されており、新生AVMと確定診断された。これまで後天性の脳動静脈奇形は7例報告されており、内6名が女性である。これらの中にはもやもや病、鎌状赤血球症、皮質形成異常などの基礎疾患(3名)や外傷(2名)の修復過程により異常な血管増生が生じたと考えられるものがあった。本症例も開頭手術という侵襲の後、脳血流の修復・回復過程に伴って生じた可能性は否定できない。脳動脈瘤手術などの開頭手術後には生じうる病態であり、経過観察のMRA撮影時には頭頂部まで撮影するなどの留意も時に必要であろう。